



Title	トカチヨフ論考 (2) 《Анархия Мысли》
Author(s)	岩間, 徹; Iwama, Toru
Description	トカチヨフ論考(1)は『思想のアナーキー』《Анархия Мысли》のIおよびIIの内容紹介であった。底本として使用したのは、前に記したように、コロンビア大学の中央図書館, Butler Libraryの特別閲覧室の書庫に珍藏されている初版本である。今回はこのテキストから書きとつた私のノートを利用したので、逐語的翻訳を見合わせることにしたが、このテキストのマイクロフィルムを入手したので、今回のトカチヨフ論考(2)は前回のあとをうけて《Анархия Мысли》のIIIおよびIVを全訳することにした。IIIはジネーヴにおける「ロシア・アナーキスト革命団体」《Революционная община русских анархистов》の綱領に対する批判である。IVはラヴロフ主義者《лавровисты》あるいは『前進』(ラヴロフの機関誌)派《Впередовцы》に対する批判である。
Citation	スラヴ研究, 8, 51-67
Issue Date	1964
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4970">https://hdl.handle.net/2115/4970</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113189.pdf



## トカチ ヨ フ 論 考 (2)

——《Анархия Мысли》——

岩 間 徹

トカチ ヨ フ 論考(1)は『思想のアナーキー』《Анархия Мысли》のⅠおよびⅡの内容紹介であった。底本として使用したのは、前に記したように、コロンビア大学の中央図書館、Butler Library の特別閲覧室の書庫に珍藏されている初版本である。今回はこのテキストから書きとつた私のノートを利用したので、逐語的翻訳を見合わせることにしたが、このテキストのマイクロフィルムを入手したので、今回のトカチ ヨ フ 論考(2)は前回のあとをうけて《Анархия Мысли》のⅢおよびⅣを全訳することにした。Ⅲはジネーフにおける「ロシア・アナーキスト革命団体」《Революционная община русских анархистов》の綱領に対する批判である。Ⅳはラヴロフ主義者《лавровисты》あるいは『前進』（ラヴロフの機関誌）派《Впередовцы》に対する批判である。

### Ⅲ

『社会革命党』《Социально-революционная партия》と自称するアナーキストのやらかした自家撞着以上のことをやるのは、おそらくとんでもなくむずかしいことだとも思う。ところが「革命オープンシチナ（団体）のロシア・アナーキストたち」《русские анархисты революционной общины》はこの困難を克服し、しかもきわめて派手なやり方でやってのけた。かれらはその「正しい懺悔」《правдивая исповедь》（かれら独特の表現だ）を次のようなもったいぶった声明からはじめる。「革命は人民によっておこなわれる。」「真の革命は人民のなかにのみある。」「われわれの（つまりアナーキストの）場所は人民のなかにのみある。われわれもまた君も（つまりロシアの革命家も）名もなきもので、またそんなものはもちえないし、そんなものをもととする空しい希望の影すらない」というのである。かれらは絶叫する。「名誉・嚇々たる名声・虚栄・野心は人民の敵やうそつきや瞞着者に残しておいてやろうじゃないか！」（стр. 4, 5）。「人民そのものから出たもの以外のまた人民のなかに在るもの以外のあらゆる影響はただ大衆をあやまった道に向けさせ、かれらをだまし墮落させるだけだ。」「われわれはすべてつぎのことを理解しなければならぬ。すなわち革命の事業において、最も熟練し最も賢明な人、天才でさえ、大衆に与えるものはただ大衆が自分のなかにもっているものだけだということである。」「革命は、教師のいないところでのみ、勝利するであろう！」（стр. 12, 13, 14）

以上の諸格言の不易の真理を本当に信ずるひとはいったいどのように行動すべきなのだろうか？

おそらく、彼は、謙虚に頭を垂れて、人民（народ）の隊伍のなかにはいり、人民に向かってこういわねばならぬわけだ。「やあ、人民の君よ、ぼくを君の仲間に入れてくれたまえ。ぼくが君に教えるものなんかにひとつないんだ。なぜならぼくの知っていることは全部《すでに君自身のなかにあるからだ》。ぼくはまた君に影響をあたえようとも思わない。なぜなら《人民から出ない、また人民のなかにはない》一切の影響はただ君を邪道に誘いまた君を裏切るものにすぎないからだ。君自身革命をやり給え、百も御承知のように、君には先生なんかいない、君のやることまたいうことすべてはかくあらねばならぬものなのだ。ぼくは万事無条件に君の指図どおりやるよ《自分の名声だの功名手柄をたてたいという望み》を棄てるよ。」

さよう、首尾一貫した人だったらまあこんなふうに振舞うことになるだろう。

ところで、首尾一貫しない人だったら？ 正にその逆だ。大風呂敷をひろげ、傲然と頭をあげて、独裁者のような調子で人民に向かって次のようにお達しを告げるだろう。「人民よ！ 聞け！ かく申すおれさまはこういうものだ。おれの祖国は——世界革命だ。なるほど、こんにちまでおれはまだ世界革命という祖国をもっていない。しかしお前はそこの祖国をおれに呉れなくてはならぬ。お前は世界革命をやらなくてはならぬ。この世界革命がこれこれのものを破壊し、破壊されたものの上にこれこれしかじかの制度をうち立てよう希望し要求する。下郎ども、お前がおれのいうことをきかず、おれの指図に従わないならば、そのときこそ眼に物をみせてくれるぞ！ おれはお前を監視するだろう。そしてお前に向けられるおれのやり方は《最も精力的なものとなるだろう。》お前が世界革命をやれるまでは、おとなしく坐ってつべこべいわないことだ。\*）

\*）ロシアの革命家は人民運動に世界的性格をあたえなくてはならぬ。それ以外の国民的あるいは地方的運動は成功しえないし、必然的に敗れ去る。

まさにこのように「ロシア・アナキスト革命オーブシチナ（団体）《Революционная община русских анархистов》は振舞ったのだ。たったいま人民に教えることは無益だ。人民から直接発しない。あらゆる外部からの影響は有害だ。革命の事業は人民自身に任せるべきだ等々といったばかりなのを忘れて、大威張りで三脚椅子の上にふんぞりかえって、自己満足の感激をもって布告する。「天の加護により、われわれ—アナキスト・オーブシチナ（団体）は次のことを必要と考える。

1. 「あらゆる宗教的、政治的、法律的、経済的また社会的制度（上記の制度はみな社会的な制度ではないのか？）の破壊…」

2. 「解放された大衆の独立にして完全に自由な組織の設立」

否定的あるいは破壊的観点から、われわれは次のことを欲する。すなわち国家の廃止 破産 (!?) 完全な解消…集团的あるいは個人的義務の支払、遺産譲渡におけるあらゆる干渉の廃止、あらゆる税金の廃止、最高から最低にいたるあらゆる国家行政の廃止、諸身分・官僚・軍隊・магистратуры (?) ・警察・大学・僧侶の廃止、独占・特権・私有財産

の廃止…」

「肯定的な…観点から、われわれは「革命諸グループ」《революционные группы》を「革命オープンチナ」《революционные общины》に組織しなければならぬと考える。各オープンチナは厳重に定められた委任をうけたその代表者を革命の「根源地」《очаг》(?)に派遣せねばならぬ。それから、これらオープンチナとオチークは自分からフェデラーツィア(連邦)をつくり、蜂起した地方のあらゆる拠点に(?)……絶えずバリケードを維持しなければならぬ。「フェデラーツィア(連邦)の仕事を支配するものは、完全に独立のグループで、相互に補足しあい、助けあうグループに以上の目的をもって分属される代表者である。そのグループというのは、たとえば、給養、革命の防衛、労働の組織、資本の予備的差押え、資本と労働手段を農村及び工場の同志の手へ一時ひきわたすこと、交通路、交易(?)教育等々を管理するグループである。」(с. стр.4-8)

「天の加護により、われわれ、ジ・ネーヴその他にあるロシア・アナキスト革命オープンチナ(団体)《революционная община русских анархистов》は以上のことを希望し要求する。われわれはまた次のことを要求する。人民はいかなる教師(勿論、われわれを除いて)ももたぬこと、また「人民から発しない影響」はいかなる影響にも(われわれの影響は除く)従わぬこと。

これはまことに結構なことだ。しかし君は確実に知っているのですか——アナキスト・オープンチナ《община анархистов》とやらいうが——いったい君の要求や希望が人民の要求や希望と一致しているんですか? 君は、みたところ、大変人民の理性を尊重しているようだが、どうなのかね? かりにいつか人民が君の要求やら希望やらを知ることができたとしよう。たとえ知っても人民が君の要求やら希望やらに対してまた君に対してホメロスの哄笑をもって大笑いしないでもないということを一瞬でも考えられないものかね? 君が何を望んでいるかを君自身が御存知ないことをまったくはっきりと見また理解するためには、特別の明察も広い知識も深い知恵も必要ではない。君はいかなる権力も存在しないことを望んでいる。と同時に君はオープンチナの代表者を以てたくさん各種のまた不可能でさえある省(министерства)を有する連邦国家を立案しているではないか? 君はこれらの省が相互に補足しあうことを望んでいる。と同時にそれらがお互いに完全に独立していることを望んでいる。君は私有財産の廃止を望んでいる。と同時に「遺産の譲渡においてはなにも干渉しない」ことを要求している。つまり個々人はこれと思うものには自分の死後遺産を残すことができるというわけだ。君はあらゆる税金の廃止を望んでいる。その君が国民の給養、交通路、教育等々の省をつくるというのだ。オープンチナが国民の給養や教育や交通路の維持になにひとつ与えてはならぬとすれば、いったい、これらの省は何を司り、何を管理しようとするのだ? 君は国家の廃止を望んでいる。と同時に国家の破産を望んでいる。廃止されてしまった国家が破産できるとでも思っているのかね? 君は「あらゆる現行の経済および社会制度」の廃止を望んでいる。と同時にあらゆる制度のなかで最も基本的かつ最も本質的な制度——交易を残している。君は望んでいる…もうやめよう。まさか君の矛盾する希望、君

の自家撞着、君の赤ん坊のような幼稚な言行の全部を列挙したってはいじまらないではないか？もしそんなことにでもなればわれわれの論文を長々とひきのぼして一冊の本にしなくてはなるまい。しかし、われわれは、なお、ロシア無政府主義者の、疑いもなく、ひとつの最も喜劇的な要求について述べないで、わが革命思想のこの奇妙な産物と別れるわけにいかない。

勿論、周知のごとく、社会革命というものが紙上の布告によっておこりうると真剣に信じているようなナイーブな人々がいるものだ。そういう人々は、もし今にも国家、教会および家庭を廃止するという布告を出せば、明日にも国家も教会も家庭もあと方もなくなるだろうと信じているのだ。無政府主義者はこういう紙上の革命家に最も深い軽蔑を以て対している。この軽蔑から判断すれば、無政府主義者は紙上の革命家と何ら共通点がなく、彼ら自身紙上の革命家でなく、本物の革命家たらんと欲していると思われるかも知れない。だが、いったい何が判明するのか？ 当の彼らもまたそもそもただ紙きれだけで革命をやりたい連中だということが判明するのだ「この(つまり全破壊)のための至近な方法としてわれわれ——天の加護によりアナキスト・オープンチナ(община анархистов)——は、すべての地代証書、私有財産、抵当権、紙幣、利権、結婚その他の証書、旅行免状、寺院戸籍簿およびあらゆる公式紋章入り用紙の根絶を考える。」(стр. 6)

いったい彼らと紙上の革命家とを区別するものは何か？ それはただ紙上の革命家がおお若干社会に通用している公式紋章入りの用紙を加えて、一切を廃止しようとしているのに対して、無政府主義者はすべての公式紋章入り用紙を火に燃やして、一切を廃止しようというところにある。しかしそれはただ別のソースをかけただけのことで、同じように馬鹿げたことではないか？

おお、あわれなロシアの革命思想よ、お前は何という自己矛盾、不合理、また無意味の人跡未踏の密林に迷いこんだことか！正気にかえり給え。考え直し給え。こんな一切のごまかしの馬鹿げたことを払いおとし給え。アナキーのどろ沼からいち早くしっかりした大地へ出てゆき給え。そうしないと、おそらく、お前は耳まで泥沼にはまりこんでしまうだろう！

とはいうものの、われわれはまだこの沼の最も罪のないまた危険のない部分だけに触れたにすぎない。ここで成長する馬鹿げたことや無意味なことは一般に極端な幼稚さと善良さを特色としている。あきらかに、それは、いわば、直接心から、流れ出たものであり、それを伝道する人々は、心からその真実を信じているのだ…そんなわけで彼らは諸君に憐憫以外の他の感情を起させないのだ。諸君は彼らを珍らしいものとして観察する。そして思わずこう独り言をいう。「あの連中を勘弁してやろうじゃないか、思慮のある人間の分別というものはまことに情け深くまた憐み深い、あの連中を勘弁してやろう、あの連中は何をいっているのか分かっていないのだから！」

しかし、馬鹿げた沙汰や無意味さ加減がそのナイーブで善良な性格を失い、それらの故意の詭弁、計画的なインチキになっているような思想のアナキーの面にいまやわれわれは深く思いをいたさねばならぬ。これは——最も危険なところだ。誰かここに足をふみ入れたら最後、ここから這いあがることはもうむずかしい。なかんずく、その場所

は巧みに青草で隠されているので、遠くからだと心を魅かれる景色でさえある。おそらく諸君の眼前には新鮮な、かぐわしい、みどりの草原がひろがっているように思えるかも知れない。しかし近づいてみたまえ、いたるところから泥沼の毒気が諸君をとりまくだろう。そして諸君は諸君を魅了した青草が——泥沼の青草だったとことに気がつくだろう。

#### IV

さきの論文でわれわれは在外の無政府主義者の二つのフラクシヨンの信条告白 (profession de foi) を考究した。われわれは彼らがロシアの革命青年にさずけた勸告と教訓は確実性も首尾一貫性もないことをみた。だが、この確実性のないこともまた首尾一貫性のないことも、『前進』《Вперед》という雑誌を機関紙とする第三の在外のフラクシヨンの信条告白とくらべたら確実性と首尾一貫性においてまだまじだとみていいだろう。最初の二つのフラクシオンについては、われわれは、たとえいくぶんなりとも、なんらかははっきりした観念を、どうやら組み立てることができる。われわれはいくぶんなりとも彼らの相貌の若干の特徴を再現することができる。われわれはたとえおよそではあるが、彼らは何を欲しているかを判定することができる。彼らはアナーキー «анархия» を欲しているのだ。なるほど、彼らは、アナーキーとは何かを理解していない。しかしそれにもかかわらず、彼らは何にすがりついているか、何が彼らを統一しているか、彼らの旗にはどんな色彩が施されているか、彼らにとって何が大事か、たとえ言葉 «СЛОВО» であっても、彼らはそういうものをもっている。第三のフラクシヨンの代表者にはそういうものすらないのである。彼らにあってはひとつひとつの言葉が両義性をもち、ひとつひとつの立場が謎なのである。彼らはあるひとつのことを肯定するかと思えば、同時に否定する。煽動するかと思えば、同時に勇気を阻喪させる。彼らのすべての観念は一種の折衷的カオスである。彼らのすべてのプログラムは、一定の意味をまったく欠いた大げさな言いまわしになっている。彼らは何を欲しているのか、何を固守しているのか、何を提案しているのか、わが革命党のなかでいかなる立場を占めているのか、あるものと何がちがひ、他のものと何が一致しているのか、さっぱりわからないのだ。すこしでも自分の立場をあきらかにしている革命サークルは彼らを避けている。彼らの革命的教義問答についていえば、そこには最も矛盾した意見が存在する。この教義問答が矛盾を以て織りなされているという点だけは万人の認めるところだ。そして、事実、彼らのいっている意味をあきらかにしたいと思うものは、彼ら自身の思想の範囲外のどこかで論証をみつける必要はない。彼らを叩き伏せるためには、彼らの意見をいっしょに並べるだけで十分だ。これら紳士諸君の思想の所産を御存知ない人々は、おそらく、悪意ある誇張だといってわれわれを非難するだろう。到底そんなことは信じられそうにもないと思われるかも知れない。しかし実際われわれはなにひとつ誇張していない。読者自身もすぐそれを納得されるとおもう。

このフラクションの信条告白は、まず第一に、ロシアの社会＝革命青年に向かったのよびかけのなかに表現された。第二に、このよびかけ（обращение）の著者が出している『前進』《Вперед》の若干の社説のなかで表現され、それはよびかけのなかでも扱っているのと同じ問題について論じているものである。それ故『ロシアの社会＝革命青年へ』《К русской социально-революционной молодежи》というパンフレットも本論の主要な対象となるが、しかしなお、われわれは『前進』の社説をも引用しなくてはならぬ。

上記のパンフレットははっきり論争的性格をもっている。これは『前進』の編集者に反対して書かれた他のパンフレットに応戦したものだ。この二つのパンフレットでは、個人的要素、個人的論争が重要な役割を演じている。勿論、われわれはここでこういった事柄には言及しないだろう。個人的なことはすべてわれわれの分析からきちんと除くであろう。このパンフレットの論争的なわさびをとり去って、「社説執筆者」の立場によってこのパンフレットの立場を補足して、それを全体としてひとつにむすびついたものにまとめあげるように努力してみよう。そしてその全体がまったく万花鏡のような美観を呈するとき、そのとき…そのときこそ読者自身判断し給え。つまりわれわれの仕事は終るわけだ。このような思想のアナーキーの所産があるということを確認すれば十分であり、それだけでこれらを検討する面倒を免かれるわけだ。

ロシアの青年によびかけた革命のシンボルの第一テーゼは次のように述べている。

「われわれは、帝政政府がロシア人民の敵であること、現行社会体制がロシアにとって破滅であること、これをわれわれとともに認識するすべての人々をわれわれ自身のところへ招き、またわれわれ自身といっしょに招く」（см. К русской соц. революц. молодежи, стр.6）このパンフレットの40頁と44頁には、これら招かれたもののなかから次のようなすべての社会革命家は除外されているのだ。つまり自分の手中に政治権力を奪取することによってあるいは革命的独裁によって社会革命の実現を志すもの、またたとえ革命的独裁を否定し、一般に純粹に人民革命を主張しても、自己の実際活動において、目的は手段を正当化するという原則を是認するもの、そういう社会革命家は除外されるのである。

御覧のようは、招かれるものは多数だが、えらばれるものは少数なのだ。

第二のテーゼはこうだ。多数者自身がみずから革命の要求、目的および手段を自覚するのを待とうとしないで、少数者によって遂行される革命は人民の社会革命ではないというのだ。「真に人民のために遂行される革命は、ただ人民によってのみ、少数者でなく多数者によって遂行されるであろう。」（стр.27）

『前進』の第21号と第26号（1875年と1876年）において著者はこのテーゼを次のような命題をもってひっくりかえしている。「歴史全体をつうじて完全に自覚された運動は一度もおこったことがない。目的および手段の完全な自覚は少数グループや特定の少数者のなかに存在した。

彼らの周囲には、明確な自覚が次第に弱まる多数の人々やグループが存在した…完全に自覚せる、半ば自覚せる、また熱烈に同情せる革命家たちの層の背後に、歴史は旧秩

序に苦しみ、旧秩序を憎悪しうるものを準備した。」

著者は自覚せる、半ば自覚せる、また単に同情せる革命家と多数者とを対置しているが故に、われわれは次のように推測することができるわけだ。つまり、この著者の意見によれば、多数者なるものはあらゆる自覚を欠如しているばかりか、社会革命の思想に共鳴することさえできず、社会革命の目的や手段に関する観念をほとんど持ち合わせていないものだということだ。

「自覚せる、半ば自覚せる、また同情せる層、すなわち革命的少数者が強力な組織によって統一されるとき」とこの著者はつづける。「爆発の瞬間に被圧迫大衆、つまり多数者が必然的に彼らといっしょになるであろう。」これらの言葉からあきらかなように、爆発、すなわち革命は多数者ではなく、少数者によって遂行される。そして多数者はただ少数者に「合する」«присоединяется»だけのことだ。それで、その後の革命の運命は、この著者の言葉によれば、この少数者がどのような旗をかかげるかによって左右されるだろうというのである。したがって、もし自覚せざる多数者が自覚せる少数者に合し、この自覚せる少数者が社会理想を追求し、人民の利益を主張するならば、少数者によって遂行される革命は社会革命また人民革命となるわけだ。

第三のテーゼはこうだ。「人民の準備ができるまで、人民を叛乱によび出してはいけない」(стр.21) というのである。人民の革命への準備は人民が「社会悪」«общественное зло»を理解する程度によってきまる(стр.32, 33, 34 и др.)したがって、人民が「自分の要求を会得する」とき、人民が「社会悪の本質を理解し」「革命的真理をその実際の適用において」ものにするとき、そのときこそはじめて人民は革命への準備ができるだろうというのである。

『前進』(第21号)の社説の筆者はこれとは反対に次のように主張している。人民をいつか「明確な自覚にまで」(社会悪、自己の要求、革命の目的、手段その他の自覚)みちびこうという希望はユートピア的希望だというのである。したがって、人民は、全体としてみれば、決して革命への準備ができないというわけだ。

この思想をさらに発展させながら、この筆者は次のようにいう。もし社会革命の課題その必然性等々を理解する意味において、少数者のみが、つまり「完全に自覚せる、半ば自覚せる、また同情せる」革命家たちより成る少数者のみが準備ができていれば«готово»、つまり宣伝がおこなわれていれば«спропагандировано», それだけでも社会革命の成功に十分だというのである。そこでこういうことになるわけだ。少数者は、人民の準備ができるまで…つまり「人民の敵はどこにいるか」を自覚し、「自分の権利、自分の義務、また自分の権力を自覚する」まで、待つ必要はないのだ。

ところで他方において、待つことを欲しない革命家たちは、この同じ筆者の言葉によれば「スパイ＝挑発者、ナポレオンの白いブルーズ、かつてのヴェルサイユ宮殿の反動家等々の類い」にちがいないという。

そういったあとから、ほかのところでも、こんなことをいう。「この(つまり革命)運動に参加する多数者がその課題を明白に理解するまで待つことができるかのように考えている理想主義者の理解は極めて浅薄である」(『前進』第26号)。

第四のテーゼはこうだ。「社会悪を理解させるプロパガンダ」はその本質において「社会悪に対する」アジテーションである。したがって、「論理的にプロパガンダはアジテーションだといえる。プロパガンダとアジはちがった力をもつ《разносильные》、ちがった価値をもつ《разноценные》手段でないばかりか、相異なる《различные》の手段でさえもない(стр.32,33,35)、つまり、プロパガンダもアジも人民を革命に向かって準備する同一の手段である。アジなきプロパガンダもない、プロパガンダなきアジもない。その著者が『前進』(第26号)の社説のひとつで、次のようにプロパガンダとアジを同一視することをひっくり返している。

「あきらかにされた生きた事実はそれ自身行動への熱烈な刺激である…そして社会的真実は生活の最も焦眉の諸問題と密接にむすびついているので、それをはっきり理解しているすべてのものは、まさにこれによって動揺させられる…

そういう人々にとって生きた事実は行動への刺激としても役立つ」(стр.33)と上述のパンフレットのなかで語っているのだが(стр.55)、われわれは『前進』のなかで次のようなことを読む。「少数の人々だけが活動において…明白な理解によって手びきされ…巨大な多数の人々はただ激情や熱中に動かされて行動するというのは正しくない。そのみならず、社会的課題を理解しているもののなかでも、その理解が確信に移り、つまり行動することが自分の理論的要素と実際の要求とをひとつにむすびつけるものだけが有益な活動家となりうる…」(第26号)。というのはつまり理解だけでは、たとえそれが極めて明白であってさえも、その理解にしたがって、人々を行動へ駆り立てるにはまだ不十分だということだ。ここから著者は極めて論理的に、自分のパンフレットのなかで語ったことと反対の結論を出している。即ち「プロパガンダはあらゆる重要な意義をもっているにもかかわらず、この方法だけでは甚だ不十分である…(第26号)、そして社会変革の準備のためのこの第一の方法に社会変革の準備のための第二の方法——社会革命的アジを付け加えなくてはならぬ。」したがって、プロパガンダとアジはまったく同一の方法ではないわけだ。つまりそれは革命準備のための二つの相異なる手段ということになる。

この同じ論文のなかでさらにこんなこともいっている。「労働者社会主義の真理の単なる解釈や理解としてのプロパガンダは、理解の楽しみに耽けるために、生活に背を向け、実際活動から離れるような思想の抽象的俗物根性を他の人々のなかに発展させる可能性をあたえる…」

プロパガンダのこの有害な結果を防ぐためには、アジが必要だ。ここから、プロパガンダとアジは相異なる手段であるばかりでなく、相対立する手段でさえあるということが出てくる。前者は実際活動に背を向ける、後者は実際活動を刺激する。前者は俗物的思想の発展を助ける、後者はそれを麻痺させる。

しかしこのような場合、アジとは何だろうか?「革命家=社会主義者にとっては」と『前進』の編集者は自分のパンフレットのなかでいう「アジは現象の解釈である」(стр.55)何をいっているのか、現象の解釈だけではもはやアジではないとこの同じ編集者が自分の雑誌の社説のなかで断言しているのではないか。アジのためにはなにお何かが必要だ。感

情や情緒の刺激だ、しかしそのためには「明白な理解」ではまだ十分ではない。それどころか「明白な理解」は往々にして俗物根性へみちびき、行動に背を向ける。

どうしたものだろう、何をなすべきか！…「わが親しき友よ、謎を解いてくれたまえ！…」

第五のテーゼはこうだ。「革命の当然の準備は、不可避免的に、プロパガンダとアジによって人民に向かっておこなわれる革命的アジである。」しかし「アジは、革命的真理のプロパガンダとしてのみおこなわれるにすぎないだろう」、「社会悪」の諸原因や本質の解釈としてのみおこなわれるにすぎないだろう(стр.33, 35)。したがって、パンフレットのなかで表現された『前進』の編集者の意見によれば、人民を革命に向かって準備させる重要なまた終局的な方法はプロパガンダでなくてはならぬわけだ。

『前進』第二号の社説に述べられたこの同じ編集者の意見によれば、プロパガンダはただ「社会主義の教説にすでに触れたものにとって」「自覚せる、また半ば自覚せる」革命家のグループにとってのみ必要だ。同情者グループや「憎悪せる」大衆(つまり人民)のためにはアジが必要だ。「上記の二つの要素(完全に自覚せる革命家と半ば自覚せる革命家)はプロパガンダによって、労働者社会主義の課題の理解をはっきりさせることによって、組織され拡大する」。他の二つの要素(同情者と憎悪者)は、「現行秩序に対する憎悪を刺激し、これをひろげることによって、社会=革命的アジによって組織され拡大する(『前進』第26号)。

これはかなりはっきりしていると思われるではないか？ 大衆、つまり多数者にはアジが必要だ。つまり現行秩序に対する彼らの憎悪をかきたてることが必要だ。少数者にはプロパガンダが必要だ。つまり「労働者社会主義の課題の理解をはっきりさせると」が必要だ。

ところが、次号の『前進』第27号で、この同じ編集者が、アジだけでは不十分だ(人民のために)、プロパガンダが必要だ、ロシア社会の知識層は人民が「世界思想の成果を摂取する」ように助けてやらねばならぬ、この思想のみが革命中また革命の翌日に人民を不可避免的に脅かす危険から人民をあらかじめ守ってやることができるのだ、と断言する。

結局、いったい何をしなければならぬというのだ？ この著者がプロパガンダもアジもまったく同一のものだという観点に立ったとき、もはやこの問題に対してたしかにこうだと確答できなかつたのである。

そのようなときに彼は臆面もなくこういったのだ。「革命的真理のプロパガンダが必要だ」。プロパガンダのみが革命に向かって人民を準備させることができるといったのだ。しかし、もし諸君が、『ロシアにおける革命的プロパガンダの任務』《Задачи революционной пропаганды в России》というパンフレットの著者と同様に、彼に向かってプロパガンダだけでは不十分だと注意してみたまえ、そうすれば彼は上記の著者に答えたと同じように諸君に次のように答えただろう。「私がプロパガンダというときはアジの意味も含まれているのだ。何故ならアジなきプロパガンダは考えられないし、プロパガンダなきアジも考えられないからだ。」しかし、その御当人がプロパガンダとア

ジとの相異を設けたいま、もはやそんなことをいえないはずだ。——それ故彼は正直な答を避けているのだ。多数者にはアジが必要だ。つまり現行秩序に対する多数者の憎悪をかきたてることだけが必要だ、と彼は『前進』第26号でいっている。しかるにだ、多数者の知識の不足を補ってやる必要がある。「世界思想」の成果を多数者に伝える必要がある、と彼は第27号でいっている。それから、この同じ号でこんなこともいっている。即ち知識階級の青年に課せられた義務は……労働者社会主義の要求のプロパガンダと社会＝革命的アジの助けによって、人民の政治的勢力の準備の出来た諸要素を連帯的全体に結合することだというのである。一見ここから次のように結論することができるだろう。この著者はプロパガンダとアジという二つの手段を同時に人民に対しておこなえと青年に勧告しているのだと。ところがそうではないのだ。この結論はまたもや正しくないことになるのだ。というのはこの著者は人民全体についていっているのではなく、ただ人民のなかですでに準備の出来た諸要素について述べているにすぎない。人民がすべてこのような準備の出来た要素であるのか？ 別の言葉でいえば、人民全部に対してこの二つの方法が適用されるのか、それともただ人民のある一部に対してのみ適用されるのか？ もし人民全部に対してならば、その場合、おそらく、「世界思想の所産」が全人民に伝えられるまで、待たねばならないだろう。もしただ人民のある一部に対してならこの一部はどの位の大きさであるべきかという別の問題が出てくるだろう。

第一の場合、つまり、もし世界思想の成果が全人民に伝えられるまで待たねばならないとすれば、われわれは、同じこの著者のいうところによって（第21号および第26号参照）、「ユートピア的希望」を実現する不可能を信じている「浅薄な理解をもつ理想主義者」に類するものとならねばならないだろう。

第二の場合、つまり、もし「世界思想の成果」が人民のほんのある部分のみに滲透すれば十分だというならば、またもや、われわれは、この著者自身のいうところにしたがって、真の革命の代りに、結局「新しい階級分化、新しい搾取階級を生み出し、したがって、新しい形のブルジョア社会の再興」（『前進』第27号参照）という結果にみちびかれる危険があるであろう。

さてどうしたものだろう？ いかにしてこの循環論法から抜け出すべきか？

第六のテーゼはこうだ。人民の社会革命はただ人民によってのみ実現される。人民を解放せんと欲するインテリ少数者の任務は単に、人民をしてその可能性を信じさせることにある。「彼（つまり人民）は多くの血を流す、しかし彼には神のごとき力がある」とこの著者は自分のパンフレットのなかで雄弁に語る（стр. 20）。「そして彼を救うためにゴルゴダに登る力強い勇者（つまりインテリ少数者）自身は彼の前では吹けば飛ぶよな小ばえ «микроскопическия мошки перед ним» だ。彼のみがはりつけにされた十字架をたおすことができる。社会・人民革命によってその十字架をたおすことができる。この偉大な十字架の脚下に立つ弱々しい創造物がなしうるすべては彼にこうさきやくことだけだ。君は神だ、君は君主だ、君の十字架をひっこぬき、敵どもをたたきつぶせ！ 君はそれができるのだ。それをやらねばならぬのだ！…君の歴史的十字架をわれわれがひっこぬく力はない…殉教者（すなわち人民）は、みずから十字架から下りてピ

ラトやカインの類やその他すべてのパリサイびと、それに勇士＝虫けら（すなわちインテリ少数者）をたたきつぶすまで、みずから自分の王国をつくるまで、ぶらさがったままであろう。それまではいつ終るとも知れない身の上だろう。」

『前進』のなかでは、この同じ著者が「勇士＝虫けら」《витязи-черви》と「弱々しい創造物」《слабые творения》の人民＝神に対する関係についてまったく異なる見解を述べている。

この人民＝神は「弱々しい創造物」なしには自分を救うためにまったく何もできないことになるのだ。

「弱々しい創造物」は人民を十字架からおろすイニシアチヴをとらねばならぬことになる。十字架から下ろしてやったのち、注意深い手をもって、十字架の下で待ち構えている危険から、人民を守ってやらねばならぬことになる。「世界思想の成果」をもって人民の神のごとき頭脳を充たしてやる義務があることになる。もしなにもそれをしないならば、人民＝神は、おそらく、十字架から下りられるとしても、こんどは他の十字架にぶらさがるためにおりるにすぎないだろうというのだ。

「新しい社会を脅かす危険に対する認識が不十分なまま起こった人民の爆発（すなわち人民蜂起）は労働者社会主義の共同事業にとって最も破滅的な結果を招くであろう。」  
「それは地方的ブント（местные бунты）へみちびくだろう。地方的ブントは何ら勝利のチャンスに恵まれず、その弾圧によって、ただ残余の諸グループの士気沮喪のみを招くものとして有害である」……「そして財産の共有の代りに、財産の再分配は、不可避免的に新しい階級分化、新しい搾取階級をつくり出す結果になるだろう」……それ故インテリゲンツィアの双肩にかかるものは次のようなものだ。

1) 大変革の準備と成就のためにロシア社会の社会＝革命勢力の組織における主導者としての義務。

2) 「人民の各部分間の不十分なむすびつきおよび人民に理解しがたい知識の不足からロシア人民を脅かす危険を予防する義務がインテリゲンツィアに負わされている。」

けれども、ここに問題が出てくる。「ロシア人民を脅かす危険を予防する義務…」その他は、大変革が成就されたあとにも、インテリゲンツィアに課せられるのであろうか、それとも、革命に先行する時期、準備期のみ、その責任がインテリゲンツィアに課せられているのであろうか？

第一の場合、インテリゲンツィアは、おそらく、大変革ののち、何らかの力、つまり権力を自分のものとして確保するよう努力しなければならないだろう。さもなければ、インテリゲンツィアは、たとえどんな危険であろうとも、その危険を予防するあらゆる可能性の外にみずからをおくことになるだろう。

第二の場合、準備期は、危険の諸原因が決定的に除かれるまで、つまり人民のパラバラの諸部分間の十分なむすびつきがつくられ、人民が「彼にとって理解しがたい知識」を我物とするまで、つづかねばならぬ。

二者択一が必要だ。つまりインテリゲンツィアは革命後自己の手中に権力を奪取すべきか、それともインテリゲンツィアは、「人民の爆発」がもはや危険とならない、つま

り人民が世界思想の成果を我物とし、人民にとって理解しがたい知識を獲得するというその幸福な瞬間まで、革命をおさえ、ひきのばすべきかである。

わが著者をどちらをえらんでいるのか？

これでもなく、あれでもないのだ。—「歴史は証明した(いつ?どこで?)また心理学はわれわれに次のことを確信させる(いかなる心理学なりや? 周知のごとく、心理学というものは心理学者の数とほとんど同じ位あるのだ),すなわち権力とは最もよき人々に対立するものだ。」「あらゆる少数者の権力は搾取である…」(стр. 42, 44) 革命後、少数者はいかなる権力によっても囲繞さるべきでない。革命後、ただちに「人民のオープンチナ、人民の会議、人民のグループの専制」《Самодержавие народных общин, народных собраний, народных кругов》(?) がはじまらねばならぬ。

したがって、ロシア社会の青年へのよびかけにおいて『前進』の編集者の述べた意見を判ずるには、次のように考える必要がある。つまり革命後、新しい社会体制によって脅かされる危険の諸原因は除かれるであろう。そして「オープンチナ、会議、グループの専制」すなわち多数者の専制が自己の権利を主張するであろうというのだ。

しかし、もしそうであるなら、われわれはこれらの諸原因が実際に除去されるそのときまで革命をひきのばすべきだ。

ところが、この著者はそれもまた欲しない。そのみならず、彼は(われわれが前に示したように)その瞬間のはじまるときが決してありえないとさえいつているのだ。

こんな場合、いかに行動すべきか? 待つ必要はないともいうし、また待つ必要があるともいうのだ。

さきにもいったように、われわれはパンフレットの著者——『前進』の編集者の矛盾を確認するという仕事(極めて容易な仕事)のみをひきうけ、その詳細な批評とか評価には深入りしない。お好みなら、読者自身おやりになったらよろしい。だが、まったく同一人が同一の問題について述べているこんなに完全に矛盾した見解をいっしょに並べてひきあわせていると、思わず何とかせめてこれらの矛盾を自分で説き明かしてみたくなるものだ。あらゆる現象には原因がある。したがってこれらの矛盾にも原因がある。しかしどこにその原因をみつけ出すべきか?

これまで指示されたすべての矛盾はロシアの革命的青年の実際活動の任務と条件の解明に関するものである。しかし各人のもつ実際活動の任務と条件の理解は各人の基本的な理論的見解、一般的精神、各人の世界観の方向によって決定される。つまり、この基本的見解、この一般精神、また著者の世界観の方向のなかに、われわれは、彼がわが革命青年に教授する両義的な勧告、多くの場合、邪道にみちびく公式となる勧告、つまり、「一面において同意するわけにゆかぬにしても…しかし、他面において…認めなくてはならぬ…」といった勧告がどうして生まれるかを説明する手がかり、謎ときを見つけ出さなくてはならぬ。

勿論、彼の世界観をすべて詳細にわたってまたあらゆる問題について考究する必要はない。ここではただロシアにおける革命の可能性および必然性に対する彼の実際的見解について語るにとどめる。つまり、彼が革命一般の問題について理論的に対処している

## トカチヨフ論考(2)

ということを知りさえすればいいのだ。いったい、彼の意見では、革命の必然性は何によって決定されるか、また革命の可能性は何に含まれているか？

この著者はこの点に関して彼のパンフレット『ロシアの社会＝革命青年へ』のなかで極めてはっきりとその考えを述べている。

彼は歴史的進歩の概念と革命の概念とを混同し、また同一視しているという非難された。彼はすすんでこの非難を受け容れている。「そのとおりだ」と彼はいう、「革命は歴史的進歩の表示のひとつ、歴史的進歩の要素のひとつ以外の何ものでもない。歴史的進歩と革命との間にはなんら矛盾はないし、またありえない」(стр. 26)。しからば歴史的進歩とは何か？

それは、周知のごとく、非常に弾力性のある概念で、極めて多様な、また往々にして真向から対立する人間の考えとむすびつきうる概念である。

時として、歴史的進歩という概念はあれこれの面における社会諸関係の間断なき改良と改善という考えとむすびつく。時として、それとは反対に、社会的諸関係の間断なき悪化という考えともむすびつく。また時として、歴史的進歩というのは単なる運動、悪化の方向あるいは改良の方向にまったくかわりなく、なんらかの方向における社会的諸要素の発展を意味する。あとの方に述べた二つの見解の支持者は一般に進歩の否定者とよばれる。そして最初に述べた見解の支持者は進歩の擁護者とよばれる。

この著者は進歩の擁護者の一人、進歩主義者の陣営に属している。彼は進歩を信じている、「人間の頭脳における真理は間断なく拡大し強化する」、そして「正義は生活の諸形式および諸過程においてひろがる」ということを信じている(『ロシアの社会＝革命青年へ』 стр. 25)。所与の資本主義社会体制は宿命的に、不可避的に「労働者社会主義」の勝利へみちびかれるはずだと信じている(『前進』第27号)。

進歩を信ずるそれぞれの人にとって、進歩の規準についての彼の考えがどうであろうともこのそれぞれの進歩主義者にとって、人間社会の歴史は共同生活の最もよき秩序に関する彼の理想の間断なきまた確乎たる実現である。換言すれば、社会は、発展するにしたがって、間断なく完全なものになると信じているのだ。それ故、進歩主義者は安心し自己満足している。万事よくなる、今日は昨日よりいい、明日は今日よりもいいだろうと心得ている。たとえ「進歩の荘重な行進」が時として遅れ、中断し、その真直ぐの道からまがることを認めるとしても、しかし、これら一切の曲折、遅れ、中断にもかかわらず、結局は、常に進歩は踏みならされた道に出るはずだということを疑わないのである。

進歩主義者は革命に対していかなる態度をとるべきか？

おそらく、彼の観点からすれば、革命は歴史的進歩の運動を促進する手段のひとつ以上のなにもものでもないであろう。革命は歴史的進歩の運動の方向を変更するものであってはならぬ。ただ歴史的進歩のために道を掃除するものにすぎない。社会の建物をことあたらしく建て直すものではない。ただ、それを改良し、その居住者の要求に応じ、古い、歴史的に作成されたプランの実行を前進させるものにすぎない。革命は進歩と対立するものでない。革命は単に進歩の諸形式のひとつ、進歩の諸要素のひとつにすぎない。

革命の理想は、歴史的進歩がまた実現しようと志しているものと正に同じである。

この著者もロシアの社会＝革命青年への説教のなかで以上のことを全部話している。結構なことだ。しかしここにまた最も本質的な問題が生ずる。すなわち、革命は進歩の諸要素のひとつだと仮定してみよう。一だが、この要素は必然的なものであるのか、その論理的不可避性、その論理的正当性は何にあるのか？

この著者はこの問題に対して次のような解答をあたえている。

「歴史的進歩は」と彼はいう、「人間の頭脳における真理の普及、強化にある。生活の諸形式および諸過程における正義の普及にある。歴史的進歩の課題の前半は不可避的に平和的な道によって実現される。しかし後者（すなわち正義の拡大）は、たとえ、一見平和裡に実現できるように思われるにしても、実際は多少の暴行の要素をほとんど常に必要とする」（crp.25）。

ほとんど常にとか多少とか、これはみなはなはだしい条件つきであり、あいまいである。しかしこの条件つきのまた極めて疑わしい革命の正当性でさえ何も証明されていない。何故「生活の諸形式および諸過程」における正義の拡大がほとんど常に、多少暴行の要素を必要とするのか？ この著者は答える「何故なら常にそうだったからだ」（crp.26）。だが、ここから何が出てくるのか？ 常にそうだったということから、常にそうであろうということは一般にまだ出てこない、況や常にかくあるはずだということとは出てこない。革命家の仮面をかぶらぬような首尾一貫した進歩主義者こそより論理的にものを考えるのではあるまいか？

いままで、生活の諸形式および諸過程のなかに入った大部分の正義は「闘争からたたかいとつた」ものだという事実をちっとも否定しないで、革命は、あらゆる場合、異常な、病的な、またまったく必要のない現象だ、革命はなるべく避けるべきだと彼らは主張する。そのために、人類のすべての真の友は平和的進歩に奉仕する必要があるのだという。彼らは進歩のために基礎を用意し、道を清めればよろしい。人間の頭脳における真理の普及と強化に一切の努力を傾ければよろしい。

真理を普及し、強化しながら、彼らはまさにそのことによって「生活の諸形式および諸過程における正義の拡大」を促進するであろう。その理由はこうだ。正義とは、理論においてでなく、人間の実際の諸関係の範囲内においてのみ思弁された真理そのものでなくてなんぞやだからだ。

そして勿論、自分の観点からすれば、首尾一貫せる進歩主義者は正しい、非常に正しいと万人が同意すべきはずだと思うだろう。実はどうか、もし進歩が「人間の頭脳における真理の強化と普及にまた生活の諸形式および諸過程における正義の拡大」にありとするならば、もしこのような進歩が存在するとすれば、もしその進歩が宿命的に歴史のなかに体现するならば、したがってもし歴史的人類が、真理の窮極的強化と普及へ、生活のあらゆる諸形式および諸過程にわたる正義の拡大へとみちびかれる道を間断なく進むとすれば、何故、また何のために、われわれは死物狂いでやらねばならないのだ？ 何故、また何のために、進歩の大事業を革命闘争のあらゆる偶然事にさらさねばならないのか？ これらの犠牲、この血、この同胞相喰むたたかいは何のためなのだ？

仮面をかぶらぬ進歩主義者の勧告にしたがって、平和的進歩の奉仕に加わる方がよほど賢明で、目的にかなっていやしないか？ 当の著者の言葉によれば、平和的進歩と革命的進歩との間にはなんら対立が存在しないというではないか、平和的進歩も革命的進歩もまったく同一の目的をもっているというではないか、ただちがうところといえば前者は「インキとペンによって」なされるに対し、後者は「血と鉄」によってなされるにすぎないというではないか。しかし、もしまったく同一の目的があるいはインキとペンの手段によって、あるいは血と鉄の手段によって達成されるものとすれば、誰しも後者の方法よりも前者の方法の方を喜んでよしとするのは当たり前であろう。思慮深い人だったらだれしも比較対照して次のように考えるだろう。生活の諸形式および諸過程における正義の拡大は現在血と鉄を必要とするとしても、真理はまだ十分人間の頭脳のなかに根を張らずひろがっていないというのだから、ここからひき出されてくるものといえはただ次のようなことだけだろう。つまり、真理が社会の全成員、あるいはその多数の成員でもいいが、彼らの頭脳のなかにひろがり根を張るとき、真理は、自分から (eo ipso)、彼らの生活のなかに正義を体現するのである。だからなにも血と鉄にたよる必要はないだろうということだ。そんなわけで、この著者のよって立つ進歩の理論の観点からすれば、「正義」を実現するための最も正しい、最も望ましい、また最も真直ぐな方法はただひとつ、すなわち「人間の頭脳のなかに真理を普及し強化すること」、これしかないのである。

ああ、然るにだ。著者の理論のこの完全に論理的な要求は革命的実践の要求とまったく対立するのだ。前者、つまり理論は一切の強制を否定する。真理は鉄と血によって普及し強化できないし、またしてはならぬものと認めている。後者、つまり実践は鉄と血という方法のみがそのプログラムのなかに入れられるのである。前者は生活現象の平和的解明と思想の地平線の漸次的拡大を予想している。後者は準備された観念、準備された理想の強制的おしつけを予想している。前者は説得を考慮にしている、後者は激情と直接感情を考慮にしている。前者は発展、教育について語る、後者はプロパガンダとアジについて語る。前者にとって必要なのは光、自由、あらゆる過度の圧迫と規制のないことである。後者にとって必要なのは闇、秘密、規律および組織である。

当の著者には、おそらく、これらすべての矛盾が分かっていることだろう。そしてもし彼が誠意を示したい、首尾一貫したいと思うなら、自分の進歩の理論を拒否するか、あるいは革命的実践を放棄するかしなければならぬまい。第三の選択はここにありえないだろう。これかあれかだ。つまり平和的進歩の奉仕に加わり、人々の頭脳のなかに知識を強化普及するためにたたかうか、それともこの進歩の敵となって、革命的戦士の隊伍のなかにしっかと立つか、どちらかだ。

ところが著者は和解しえないものを和解させようと望み、抱かれないものを抱こうと願った。そこで、帯に短かし、たすきに長しというていたらくになってしまったのだ。

一面、彼は「真理」が十分人民、つまり人民のかなりの多数のなかに根を張り、ひろまるまで、革命の事業はしばらく待たねばならぬとっている。だが、他面、彼は、この幸福な時節の到来を待つのはつまり実現もしないユートピアで自分を眠らせているの

だということに賛成している。

一面、彼はただ現象を説明する。つまり頭脳に作用をおよぼす必要のみを主張する。ところが他面、彼は感情を刺激し、動揺させることを勧告する。進歩の女神と革命の悪魔が彼の精神をずたずたに引裂いている。彼は進歩の女神と革命の悪魔のどちらのいうことに耳を傾けるべきか、どちらのいうことを信ずべきかをはっきり知らない。とはいえ、お上品に育った人間として、彼は、一見、あらゆる重要な場合、悪魔より女神の方がお好きのようだ。悪魔を黙らせるためには、あえて革命的プロパガンダや革命的アジまた革命的組織の必要さえ認めようとする。しかし、これらすべてを認めながら、すぐその場で、女神のお気嫌をとりむすんで、革命方式のなかに楽天的進歩の理論のオリヴ油を流しこむ。革命的プロパガンダとアジの要求はよりつつしみ深い要求、すなわち「現象の解釈」「労働者社会主義の真理の普及と強化」「社会悪の根本的諸原因の解明」によってごまかされる。最も革命的な組織でさえも、結局は、単なる道具——「解釈」「普及」上述の真理の統一と解明をもっとうまくやるための手段に変化している。よこしまな悪魔は血、暴行、殺人、破壊を要求する。センチメンタルな女神はこのようなヴェンダリ人的な要求に対しては名状しがたい恐怖におちいる。悪魔のいうことに耳を傾けて、著者は革命的恍惚状態におちいる。彼は社会革命の法廷に、「昂然と取引所へ盗みにゆく」犯罪人ども、「工場や鉄道…で力を消耗させて労働者を殺す」犯罪人ども、「数百万の自分の臣下の血を吸い、その血を浴びた頭上に帝冠をかぶっている」犯罪人ども等々を召喚する。彼はこんな奴らに対する人民の復讐をよびかける。彼は（すなわち彼の雑誌は）人民に「忌々しい悪党どもをうち殺し、うち滅してしまへ」と勧告する。彼は「真理と同胞愛の太陽」«солнце правды и братства людей»がさしのぼるであろう「血の天映（そらやけ）」«Кровавая заря»を夢みている（『前進』第12号参照）

ところが次号の『前進』第13号に、彼はたえに美しい女神によってインスピレーションを受けて、もはやまったくちがったことを歌っている。「正義の王国の建設者よ」と彼は絶叫する、「人間に対してでなく、原理に対してたたかえ！」「あらゆる殺人はおそろしい。また悲しいことだ！」「われわれはわれわれの敵に対して戦う…しかしかなる戦いをやるのか？ この戦いは一般に戦いとよばれているものとはまったくちがう。」「諸君は」と著者は旧秩序のすべての擁護者に改宗しつついう、「戦いといえば、掠奪、殺害、暴行のことだと了解する。だが、われわれはまったく別のことを考えている。われわれはわれわれの敵（すなわちわれわれの陣営の外にあるもの）のなかにさえわれわれの兄弟となりうるものをみる。そしてこのような兄弟となりうるもの（すなわち現在の敵）のひとりひとりの生命はわれわれにとってわれわれ自身より貴いものであるべきだ。」なるほど、著者は、ときあってか、革命家にも殺害、収用 экспроприация（彼は掠奪 грабeж のことをいっているのだ）また暴行に頼る必要が偶々おこることもありうると認めているが、しかし彼はこれらの手段を嫌悪すべきものとよび、あたかもそれらの手段がほとんど常に避けられうるかのように主張している。ともかく——「それらはあらゆる道徳の埒外にある」、況や「社会＝革命道徳」の埒外にあるというのである（『前進』第13号参照）。

ごらんのように、女神はここでも勝利者として残った。彼女は悪魔に鞍をつけ、悪魔の角を思いのままに操った。まず最初に彼女は革命の準備行動を平和的なそして苦しみのない「人々の頭脳のなかに真理を強化し普及すること！」に変えた。それから、最も本質的なことだが、革命の最も基本的要素—暴行を彼女は社会—革命道徳から荘重に除外した。換言すれば、革命を非道徳的な事業と認めたのである。

さらに一步を進めることは、勿論、できない相談なのだ！

しかし、いったいこれは何ごとだろう？ どうして青年は自分をこんな風に鼻づらをひきずりまわすのをゆるしておくのか？あるいは青年は自分の読んでいることが分らないのだろうか？あるいは青年のなかで結局革命の意義が風化して、革命的情熱や革命的本能が衰弱したのだろうか？

われわれはむしろ第一の仮定に組する方に傾く。この著者は極めて巧妙な弁証家、また極めて抜けめのない詭弁家のひとりだ。その上、彼の全哲学は矛盾と両義性を以て織られている。当然のことながら、精神的体操で練磨されなかった人々にとって、哲学の変てこな奸計をみやぶるのはかなりむずかしい。この著者が広く貯えた声高い言葉や断片的な思想のなかに、それぞれの人が自分の好みに合った何かをみつけ出す。—それでもう満足して、残りの全部を要らないものとして海中に投げ棄ててしまう。そしてこのようにして、その全体においてとらえられた哲学は、一見したところ、だれにもなんらの害悪をもたらさない。

しかしそれはただ一見したところそうだというまでであって、本当はまったくそうではない。

われわれがすでに示したように、この哲学は、その一般精神および方向において、革命よりも平和的進歩の方へはるかに心を惹かれている。この哲学はその本質上保守的で、反革命的である。その哲学からあれやこれやを借用することによって、青年は、自分でそれと気のつかぬうちに、その哲学が精神を滲透し、だんだん墮落する（勿論、革命的立場をはなれて墮落するのだ）。この哲学のなかに有用なものと無用なものとを分けるのは思ったほど容易なことではない。多くの場合、青年の頭のなかに、有用なものといっしょに、たくさんの無用なものがばらばら落ちてくるであろう。この無用のものでさえ自分の仕事をやる。つまりひっそりと眼にみえず、これは、鏽のように、彼らの革命的理想を腐蝕させ、彼らの革命的世界観を不具にし、彼らの革命的衝動に水をさし、またそれを失わせる。

そんなわけで、このごまかしと妥協の哲学、この革命の仮面をかぶった進歩の哲学をわれわれは、たとえそれ以上でないにしても、革命の事業の成功にとって、無意味なアナーキーの哲学と同様に、有害だと考える。